

## 牧野利用型態の相異と農業経営との関係について

原野重義\*

HARANO, S. Influence of Type of Grazing on Farming (Summary)

1. 目的 牧野利用農家の農業経営について耕種部門と養畜部門との関係を、大分県直入郡久住町牧野調査に基づき、牧野利用の異なる2群の農家の抽出によって研究を試みることにした。

2. 概況 両農家群をA, Bとすると牧野の利用概況は下表のようになり、草生の良否によって利用型態の上に大きな相違を見ている。

第1表 牧野利用概況

項目 牧野名	牧野面積	利用戸数	利用頭数	採草地と放牧地の区別		放牧型態
				町	戸	
A	146	60	124	なし		全面積放牧
B	310	106	350	あり		輪換放牧

備考 放牧期間はA, 5月10日～7.10 B, I期(5.10～6.30) II期(7.1～7.20) III期(7.21～8.10) IV期(9.26～10.15) V期(10.15～11.10)

第2表 1戸平均年間採草量

項目 牧野名	牧野		私有採草地		購入		畦草	計		1戸当飼養頭数	1頭当採草量
	生草	干草	生草	干草	生草	干草		生草	干草		
A	駄20	駄185	駄—	駄—	駄10	駄30	駄180	駄210	駄215	頭2.1	駄191
B	180	320	7	70	—	—	41	228	390	3.3	181

備考 すべて生草換算, 1駄は約12貫

では以下その要約を記すことにする。

3. 要約 1) 牧野に依存する農業においては、牧野生産物一草一により家畜を養い、また家畜を通じて得られる有機質肥料を耕種生産に与え、その生産力を向上しようとする。2) しかし牧野生産物一草一は、前掲表2群の農家の間には著しい開きがあり、この開きが農家の家畜飼養頭数、すなわち養畜収入に差異を生ぜしめ、かつ有機質肥料の耕種生産への参画においても、殊に当地の最重要作物たる水田稲作に対し、肥料費負担に軽重を与える。3) 一方、この採草量の多寡はAに見られるように、その草の殆んどを畦畔から得なければならず、しかも舎飼期間が長いため、反対に放牧期間の長いBに比較すると、現在の飼養頭数といえども長い舎飼期間を経過するには畦畔草採取という、採草労働の強化によって可能となり、耕種生産労働に種々の影響を与える。4) すなわち、採草労働の強化はそれ自体労働生産性の低下を意味するが、この労働が耕種部門の各種管理労働と時期を同じ

くすることによって、特にAでは農繁期を長引かせることになり、総合的に労働生産性の低下を来す要因を作り出している。5) 地力維持に関して、有機質肥料の施肥効果が非常に低い。これはA, B共同様であるが、水稲基肥源としての厩肥は冬季圃場に野積みし、数ヶ月間雨曝し日曝しの状態におくため、施用時の肥効分は殆んどが流失されている。このような事実は秋のピークがずっと持続される不合理な労働配分の結果生じるものであるが、地力維持に因りた養畜と耕種との結びつきに対して重要な欠陥を担っていると云える。6) かように当地農業経営は労働強化に基づく生産収益の確保という事を見出すことができるが、生産収益は極めて低く、且つ経営における耕種、養畜両部門間の補合関係の薄弱さの中にまた経営の不合理性も指摘できる。そして牧野の草生良否が以上の関係に直接影響しており、したがって草生改良と労働配分の合理化とが今後当地農業経営を営むに当つての重要な課題として残される点である。

\*九州農業試験場